

書評：Rowena Gale & David Cutler. 2000. *Plants in Archaeology—Identification manual of vegetative plant materials used in Europe and the southern Mediterranean to c. 1500*. xiii + 512 pp. Westbury Publishing & Royal Botanic Gardens, Kew. ISBN 1-84103-002-3, £75.00.

本書は、中石器時代から中世(西暦約1500年)までに、西ヨーロッパ北部から地中海のヨーロッパ地域、およびエジプトで使われていた植物を解剖学的に同定するための手引き書である。取りあげられているのは、双子葉植物81属(121種)と、単子葉植物23属(25種)、裸子植物9属(16種)、それとスギナとワラビである。対象としている組織は、木材からはじまって、葉と茎、繊維・織物・縄、紙の繊維、そして珪酸体である。

本書のはじめには、植物資料の取り扱いと解剖学的な同定のための標本の作製方法が簡略に記述される。

各論は属ごとに記述され、地理分布を含めた植物学的な概要や、文献および民俗上の使用例、考古資料の製品例を記したあと、解剖学的な形態の記載がくる。記載と顕微鏡写真はすべてキュー王立植物園のJodrell Laboratoryに保管されている標本にもとづいている。たとえばコナラ属では、属の概要のあとに、その使用例がテオフラストゥスやプリニウスにまで遡って2ページにわたって記述され、その後に考古資料2点の写真とともに考古資料の製品名が列記される。解剖学的な記載は、顕微鏡写真とともに、樹皮と二次木部に関して、落葉の種と常緑の種ごとに記されている。またカヤツリグサ

属では、考古資料としてエジプトから出土した縄や篩、パピルス、鞆の写真を例示し、桿の表面と横断面の記載が顕微鏡写真とともに提示される。

各論の後には多数の表が配置されている。最初にくるのは、広葉樹と繊維植物、針葉樹ごとに、それぞれの形質を対照した表で、ついで地中海地域で使われていた古名と現在の植物名の簡単な対照表がくる。そのあとには、76ページにわたって、各植物とその使用例の対照表が提示される。

木材組織や繊維に関する図鑑類はそれぞれ他にも出版されているが、植物を素材とした考古資料を総合的に同定の対象とした図鑑はこれまでになく、画期的といえよう。日本で考古資料を同定しているものからすると、植物学的な記載よりも、むしろヨーロッパにおける植物利用を概観した部分のほうに興味もたれる。今後、ユーラシアの東西における植物利用史を対比するうえで、貴重な資料となろう。

版型はA4版と大きく、紙も厚く、写真もきれいで、なかなか贅沢な製本である。本書の注文は、Smith Settle Ltd. (Ilkley Road, Otley, West Yorkshire LS21 3JP, U. K.; sales@smith-settle.co.uk) で受け付けている。

(能城修一)

書評：Peter Thomas. 2000. *Trees: their natural history*. ix + 286 pp. Cambridge University Press, Cambridge. ISBN 0-521-45351-8, £50.00 (hb). ISBN 0-521-45963-X, £16.95 (pb).

ピーター・トーマス(熊崎実・浅川澄彦・須藤彰司訳). 2001. *樹木学*. x + 263 pp. ISBN 4-8067-1224-8. 本体価格3600円. 築地書館, 東京.

樹木の生き様を、これまでの研究成果にもとづいて活写した書物である。執筆の動機は、樹木がこの世で生きていくにあたって用いるすぐれたデザインや戦略が各方面から明らかになっているにもかかわらず、全体を見通した書物がないことであるとされている。記述は一般向けになされており、読んで面白いストーリーを展開している。

全体の構成は、1. An overview, 2. Leaves: the food producers, 3. Trunk and branch: more than a connecting drainpipe, 4. Roots: the hidden tree, 5. Toward the next generation: flowers, fruits and seeds, 6. The growing tree, 7. The shape of trees, 8. The next generation: new trees from old, 9. Health, damage and death: living in a hostile worldとなっている。

本書はこれから樹木の研究をはじめようとする学部学生や大学院生にはお勧めしたい書物である。本書では、単に研究の現状を紹介するだけでなく、これまでの成果をもとに何を

明らかにしなければならないかを各所で論じている。そして、最新の成果や問題点を追求したい読者のために各章末と巻末にFurther readingとして文献を挙げ、先に読みすすむことができるように工夫している。

ただし翻訳本はお勧めできない。それは引用文献がすべて割愛され、適宜本文も省略したとするほか、第一翻訳者によるあとがきに、「原著と対比しながら読んでもらおうのがいちばんだ」と記されているからである。これは対訳本なのであるか、あるいは抄訳なのであるか。

文学作品ならともかく、事実を記述する書物は周辺の情報があっただけでその書物の位置づけが決まるのであろう。翻訳書でなくとも、きちんと参考文献を提示することは常識となっていており、たとえば最相葉月著『青いバラ』(2001. 小学館)には15ページにわたって欧文の文献をふくむ参考文献が掲載されている。それが書物としての当然の形態ではないだろうか。

(能城修一)